

「風立ちぬ」 ★★★

2013（平成25）年7月1日鑑賞

<東宝試写室>

原作・脚本・監督：宮崎駿

声の出演：

堀越二郎（航空技術者）／庵野秀明

里見菜穂子（療養のため軽井沢町にきた女性）／瀧本美織

本庄（二郎の同僚の航空技術者）／西島秀俊

黒川（二郎の上司）／西村雅彦

カストルブ（軽井沢町に滞在するドイツ人）／スティーブン・アルパート

里見（菜穂子の父親）／風間杜夫

二郎の母／竹下景子

堀越加代（二郎の妹）／志田未来

服部（二郎が所属する設計課の課長）／園村隼

黒川夫人（黒川の妻）／大竹しのぶ

カプローニ（世界的に著名な飛行機製作者）／野村萬斎

2013年・日本映画・126分

配給／東宝

<宮崎駿の意外な一面は、軍事おたくの戦争嫌い！>

今をときめく自民党の幹事長・石破茂は「軍事おたく」として有名。それほどでもないが、実は私も父親の影響で小学生時代から相当な軍事おたくで、雑誌『丸』を毎月購読（と言っても古本屋で）していたし、軍歌もソノシートでたくさん聞いていた。私の息子が弁護士になってくれたのは嬉しいが、そんな血筋を受け継いだためか、彼も私以上の軍事おたくで軍艦や飛行機の話はもちろん、諸外国の近年の軍事情勢についてもかなり詳しいらしい。

そんな私が今回はじめて知ったのは、生粋の反戦・平和主義者、反原発・自然保護主義者だと思っていたスタジオジブリの宮崎駿が、実は石破幹事長に負けないほどの軍事おたくだったということだ。私の息子に言わせれば、宮崎駿が「軍事おたくの戦争嫌い」であることは常識らしいが、そんな彼が「ゼロ戦」を開発設計した実在の人物・堀越二郎を主人公にした物語をマンガにしていたことを知ってビックリ！もともと、それは宮崎駿の趣味の範囲内の作業であって、決して堀越二郎の伝記を書きたかったわけではないだろうから、そこには彼の「創作」として同時代を生きた小説家・堀辰雄の小説『風立ちぬ』からの着想を混ぜ合わせているらしい。さて、たまたま姓がよく似ている堀越二郎と堀辰雄を彼ほどのようにミックスしながら『風立ちぬ』のマンガを描き、さらに今回それを映画化したのだろうか？

<1920～30年代を、日米比較してみれば？>

アメリカでは、1919年から1933年まで続いた「禁酒法時代」を描いた映画は名作揃いだ。禁酒法が「天下の悪法」であったことは今や公知の事実だが、1920年代という世界大恐慌の時代にこんな法律が施行されたことによって、①密造酒、②売春、③賭博を三大ビジネスとする「ギャング」がのさばることになったわけだ。そんな時代を描いた面白い映画が、『欲望のバージニア（LAWLESS）』（12年）だった。他方、1918年に第1次世界大戦が終了した後にアメリカの繁栄が始まったが、そんな時代に生きた謎めいた大富豪ギャツピーの「ロミオとジュリエット」ばりの大恋愛を描いた映画が『華麗なるギャツピー』（13年）だった。両作とも1920～30年代のアメリカの「古き良き時代」がよく描かれていたが、さてそれと同じ頃の日本は？

2007年のサブプライムローン問題に端を発した、アメリカ発のリーマン・ショックが2008年9月に発生し、これが世界的な金融危機をもたらしたことは私たちの記憶に新しい。他方、「暗黒の木曜日」と言われる、1929年10月24日にニューヨークの証券取引所で起きた株価の大暴落を端緒として生まれた「世界大恐慌」の影響はもっと大きく、日本もこれによって大打撃を受けることもよく知られている。また日本は、その6年前の1923年9月1日の関東大震災によって大打撃を受けていたうえ、大恐慌に伴う貧困と失業が増大する中、大正デモクラシーの流れによって花開こうとしていた民主主義や政党政治も不安定となり、軍部の力が少しずつ強大になっていった。さらに、1925年の治安維持法の制定による言論弾圧によって思想統制が着々と進み、ついに1931年9月18日の満州事変から1937年の日華事変、そして1941年12月8日の対米英戦争へ突入していったわけだ。そんな時代に青春時代を過ごした、堀越二郎と堀辰雄の2人は、さてどんな生きざまを？

<「風立ちぬ」とは？この設定には少し無理が？>

『風立ちぬ』は、堀辰雄が1938年に発表した小説のタイトルだが、これは作中にある「風立ちぬ、いざ生きめやも」という有名な詩句からきている。この有名な詩句は、ポール・ヴァレリーの詩『海辺の墓地』の一節“Le vent se leve, il faut tenter de vivre”を堀辰雄が訳したものだ。今ドキの「乱れた日本語」に馴れ切っている日本人には、この「文法」解釈は難しいかもしれないが、それはネットで調べればすぐにわかるので各自調べてほしい。堀辰雄の自叙伝的小説である『風立ちぬ』中の薄幸のヒロイン節子は、堀辰雄が1934年9月に婚約し、35年12月に死去した矢野綾子がモデルだが、その最大の「ポイント」は当時の国民病であった結核だ。

本作のヒロイン菜穂子（瀧本美織）と本作の主人公・堀越二郎（庵野秀明）がはじめて出会うのは、1923年の関東大震災の時の混乱時。それから10年後に軽井沢で再会した2人は婚約、結婚することになるのだが、菜穂子の結核が次第に悪化していく中、さて堀越二郎の対応は？

堀辰雄の小説では、主人公の「私」は小説家。したがって、時間だけはたっぷりあったらしく、サナトリウムでの付き添い（共同生活？）を含めてずっと節子の傍にいたことができた。しかし、戦時体制が急速に進む中、民間企業の中で艦上戦闘機の設計技師として腕を奮っていた堀越二郎の場合は、仕事が忙しすぎて菜穂子にかまう時間など全然とれないはずだ。そう考えると、宮崎駿が本作において堀越二郎と堀辰雄という2人の人物をあえて1人の人物・堀越二郎に仕立てあげてゼロ戦の開発というメインストーリーを描き、そこに薄幸の少女・菜穂子との恋をサブストーリーとして入れようとした狙いはわかるが、それには少し無理があったのでは・・・？

<このコラムに注目！美しい夢の世界と現実とは？>

本作のプレスシートには、スタジオジブリ・プロデューサー鈴木敏夫氏の「日本人と戦争」というコラムがあり、それは「戦闘機が大好きで、戦争が大嫌い。宮崎駿は矛盾の人である。人間への絶望と信頼、その狭間で宮さんは生きて来た。」という書き出しで始まっている。スタジオジブリのこれまでの作品はそれぞれ強いメッセージ性を持っているが、私の印象ではそれを美しい夢の世界の中で描いているというイメージが強い。それは本作も同じで、堀越二郎少年が夢の中でイタリア人の有名な飛行機製作者ジャンニ・カプローニおじさんと語り合う中で、飛行機の設計者になろうと決意するシークエンスや、太平洋戦争が終わり堀越二郎が設計したゼロ戦がすべて潰されてしまった後に再び2人がめぐり会い語り合うシークエンスを見れば、戦闘機という殺人のための道具づくりという現実が、夢の中でキレイゴト(?)として語られている感が強い。

ゼロ戦は攻撃には強かったが防御には弱かったことは周知の事実だが、当時の日本ではなぜそんな戦闘機の設計思想が生まれたの？そして、堀越二郎はそれとどう向かい合ったの？（つまり、それに反対したの？それとも賛成したの？）そんな生々しい論点は本作には全く登場しないから、私には「美しい飛行機をつくる」という夢の世界の中でのみ堀越二郎は活動しているように見えるが、さて皆さんは？

<宮崎駿のこの「矛盾」をどう読み解けば？>

本作に美しい夢の世界と現実が混在していることは、軽井沢の別荘地で堀越二郎がたまたま知り合ったケツタイな(?)ドイツ人カストルブ（スティーブン・アルパート）との「交流」を見ても顕著だ。いくら民間企業の戦闘機設計技師とはいえ、海軍からの注文で戦闘機を設計している以上、堀越二郎がこんなスパイのような男と付き合い合えば大問題になることは明らかだ。

前記の鈴木敏夫氏のコラムを読んでも「戦闘機が大好きで、戦争が大嫌い。」という宮崎駿が書いた『風立ちぬ』を映画化するのには、もともと少し無理があったことがわかる。本作は堀越二郎の少年時代から太平洋戦争が終結するまでを描いているから、本来なら一大歴史叙事詩なのだが、それを本作があまりにもサラリと夢の中の出来事のように描いているように思ってしまうのは、そんな宮崎駿が持つ「矛盾」のせいだろう。もちろん、本作の受け止め方は人それぞれだが、少なくとも『もののけ姫』（97年）、『千と千尋の神隠し』（01年）、『崖の上のポニョ』（08年）（『シネマルーム20』263頁参照）等々スタジオジブリの過去の傑作は製作意図が明確で、テーマがハッキリしていたことに比べると、本作はそこらが曖昧なのでは？もともと、それは「軍事おたくの戦争嫌い」という、宮崎駿が本質的に持っている矛盾を持ちながら本作の製作が発売した以上仕方のないことかもしれない。したがって、それを含めて本作の出来・不出来を評価する必要はあることはまちがいないのだが・・・。